

ある看護科教員のアタマの中

8

～人を動かす基本～

山岸 若菜

はじめに

教員になって1年が経ちました。

今年も2回生の体温や脈、血圧などの授業が始まっています。

看護師になるとほぼ毎日測定する体温、脈、血圧はバイタルサイン測定と言われ、基本中の基本の技術になります。

そういう基本の「キ」の技術を教えていると、本当に「わかる」と「できる」は違うんだなあと感じます。

今回は学生が手技を獲得するまでの過程で、自分なりに感じたことを書こうと思います。

動脈行方不明事件

バイタルサイン測定の練習する前には、まずなぜその技術が必要か、その技術でどういうことがわかるのか、その結果どこを見てどうしたら良いのかを学習します。

そのあとにバイタルサイン測定をどうやってするのかという方法を学習します。

例えば脈拍を測定する時には手首の橈骨動脈という動脈を探すとか、血圧測定なら肘のところにある上腕動脈を探して血圧計を巻くと言った感じです。

ここまで座学で勉強した後、「演習」と言ってナース服に着替えて実習室で実際に学生がお互い手技の練習をするのですが、教員にとってはここからがとても大変です。

私が勤める学校は一学年に学生が100人います。

10人ぐらいの教員が自分のグループの学生を10人ほど担当するという形で演習を進めます。初めて血圧計や聴診器を扱うのですから学生のテンションは上がっています。

でもよく使い方がわからないので、聴診器の耳入れるところが反対向けだったり、血圧計がもう無理！と言うてるぐらい空気を入れてパンク寸前になったりはじめはもう大騒ぎです。

一通り聴診器や血圧計の扱いを練習して、次に起こるのが「動脈行方不明事件」です。

座学では見つけられていた動脈が「ありませ〜ん！」「動脈がどこか行きました〜！」という学生が多発します。

「ないことはない、探すのです。」とこちらもはじめは静かに言っていますが、あまりに「行方不明だの」、「死んでる」と言われると「ないことないわい！」「生きとるわい！」と言いたくもなります。

去年もバイタルサイン測定の演習を担当し、同じように動脈がわからないという学生に教えていました。初めてだったので「この学年がどんくさいのかな？」と思っていたのですが、どうもそうではなさそうです。

知識で「わかる」ことと技術が「できる」ことは違う、そらそうかと今年は腑に落ちました。

知識でわかったことができるように伝えねば！

山本五十六の降臨

私の中に山本五十六が降臨しました。

仕事中に何やってんねんという感じですが、こんな妄想でもしないと楽しくできません。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」

バイタルサイン測定の科目を統括している教員からあまり教員はデモをして学生にやってみせないうで、学生に考えさせてやらせてほしいという方針を伝えられていましたが、ちょっとだけ無視をしました。

コソコソと、動脈はこうやって探すとわかりやすい、血圧計の空気を抜くときはこうやるとゆっくりできるなど、やってみせて説明して、やらせてみてできたらほめまくってみました。

そうすると「もうできひ〜ん！」と逃げがちだった学生が熱心に反復練習するようになりました。

そればかりか、できるようになった学生はまだできていない学生を教えてくれるようにもなったのです。

え～！山本五十六先生すごい！（急に先生と言い出す）

『当たり前のこと言うてるだけやん』とか思っててごめんと心の中で謝りました。

当たり前のことこそ実際に実践するのはなかなか難しいものなのですね。

技術は練習すれば上手くなるものなので、なるべく繰り返し練習してほしい、でもそうなるまえに心が折れてしまいがちです。

上手いかなくても大丈夫そのための演習やん、と保証して練習したいと思わせることができたなら「わかった」と「できる」の間は埋めていけるかと思いました。

どうもうまく伝わらないなと困った時には山本五十六先生を召喚して、これからの演習も乗り越えたいと思います。